

水曜通信 9

東北学院宗教センター編

2021年
6月

LIFE

LIGHT

LOVE



「空の鳥を見よ」
(マタイによる福音書 6:26)
田中 忠雄作 1987年

山上の説教「思い悩むな」の一場面。山上の説教では様々な教えがイエスによって弟子たち及び群衆に語られる。この場面は6:26で「空の鳥を見なさい」と語るイエス。

第3回

泉キャンパス礼拝堂
ステンドグラス紹介

「コロナ禍と礼拝」

コロナ感染症を避けての生活も一年を超えました。コロナ感染症は何をもたらしたでしょうか。それは現実を問い直すことです。日常生活の中で何が不要不急か、何が必要なかを改めて考えるいい機会となっています。それはなぜか。死を前にしているからです。つまり「汝、死を覚えよ(メメント・モリ)」です。

東北では10年前に震災を経験し、その惨状は今でも決して忘れません。しかし今回の災害は世界規模です。日常生活を中断して感染、つまり死の可能性を避け、世界中がマスクをしています。

そこで礼拝の、また宗教の意味も問われてきました。しかし礼拝とはまさに、現実を問い直すことなのです。礼拝は日常生活を一時中断して、生きる意味を問います。そして神さまの受肉によって私たちの生が神さまに繋がっていることを確認し賛美するのです。



コロナ禍は貴重な時間を与えてくれました。今は世界中が死に直面しています。あたかも世界中が礼拝の時間を持っているかのようです。コロナが収束しても、この時間を忘れてはならないです。礼拝の意味はそこにあります。

(理事長特別補佐〈宗教センター担当〉 鐸木 道剛)

次回：第44回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）

7月21日配信予定

学校法人東北学院ホームページをご覧ください。

※第43回水曜公開礼拝は都合によりお休みいたします。

【第1部 礼拝】

説教：原田 浩司（本学文学部准教授）

奏楽：渡辺 真理（本学礼拝オルガニスト）

【第2部 音楽による賛美】

演奏：渡辺 真理



第42回 水曜公開礼拝報告（説教：鐸木 道剛、奏楽：大泉 真理）

2021年5月26日（水） 公開オンライン礼拝

讃美歌：280番「わが身ののぞみは」
聖書：マルコによる福音書 9章14～26節
讃美歌：301番「山べにむかいてわれ」
説教：「大切なものは目に見えない？」
頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

「大切なものは目に見えない。」これはサンテクジュベリの『星の王子さま』のとても有名な台詞です。サンテクジュベリはフランス人作家ですから、この言葉はヨーロッパ的、そしてキリスト教的かと受け止められますが、これは旧約的、あるいは東洋的さらには仏教的なのです。聖書は旧約の「見えない神」が見えるようになったことを言うのです。受肉です。そして、それによって見えるこの現実世界が肯定されるのです。「神の無化」による「被造物の聖化」の構造です。ただ、その前提である旧約の「見えない神」を忘れては、見えるものを拝むエジプトの偶像崇拜に逆戻りです。受肉はパウロも言うように、「ユダヤ人には躰き、ギリシア人には愚か」（コリントの信徒への手紙一 1：23）です。とても信じられません。土着なんかできるはずのない超越です。ですから霊に憑かれた男の子の父親は言います。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」（マルコによる福音書9：24）（鐸木 道剛）

前奏：J.S.バッハ コラール編曲「主イエス・キリストよ、み顔をわれらにむけたまえ」BWV709
後奏：J.S.バッハ コラール編曲「主イエス・キリストよ、み顔をわれらにむけたまえ」BWV726

前奏、後奏のコラールの主題は「聖霊の導き」です。前奏のコラール編曲は、ソプラノが美しい装飾コラールとなっています。対位旋律は、聖霊の助けと恵みを表現し、さらに最後の2小節は、メリスマの中で、“真実への道”へと向かって行くかのようです。後奏の編曲は、若きバッハが、リュベックでの見聞の旅（1705-6）を終えた後に書かれた曲です。聖霊を表すアルペジオの後、突然の転調とペダル半音階進行はエネルギーに溢れています。

（本学礼拝オルガニスト 大泉 真理）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：大泉 真理）

1. D.ブクステフーデ（1637-1707）：バッサカリア二短調 BuxWV161
2. J.S.バッハ（1685-1750）：コラール編曲「神は我がやぐら」BWV720

バッサカリアとは、17世紀、バロック時代に流行した、オスティナート・バス（低音反復）を持つ3拍子の変奏曲です。この曲も4小節のオスティナート・バスが流れる中、様々な変奏が展開されます。哀愁を帯びた美しい旋律が重なっては離れ、連続する和音の緊張が曲を盛り上げ、その緊張を和らげる優雅な三連符と二連符の掛け合い。北ドイツ・オルガン楽派の巨匠ブクステフーデの楽曲の魅力が随所に見いだされる作品です。

2曲目は、ミュールハウゼンの聖ブラジウス教会のオルガン改造披露でバッハが演奏したコラール編曲です。譜面には、新設の「Fagotto16」と第三鍵盤の「Sesquialtera」、第一鍵盤「Rückpositiv」への鍵盤交代の指示が珍しく書かれています。プロテスタント教会の至高の讃美歌マルティン・ルター作詞作曲の「神は我がやぐら」をテーマに、バッハの演奏を聞いた聴衆は、既に教会を去ってしまったバッハの偉大なる功績を理解するには、まだ時が必要だったかもしれません。

（本学礼拝オルガニスト 大泉 真理）



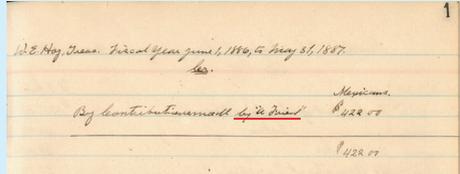
東北学院の草創期 (8) 「どのように？」

1886 (明治19) 年の春、押川は前号で紹介したとおり新島との調整が不調に終わり、ホーイも仙台での学校設立がドイツ改革派教会外国伝道局の賛同を得られず、二人とも困惑していました。

その矢先、一人の寡婦が古銀十二枚を携えて押川を訪ねました。婦人は香味チカといい、押川が創立した仙台教会の会員でしたが、神学校設立の計画を聞き、老後のために蓄えた一分銀十二枚をすべて捧げました。押川は目に涙を浮かべながらホーイに「私たちの祈りは聴かれ始めた」と報告します。ホーイはこの義拳に心を打たれ、そのうちの九枚を自分で買い求めて、これを外国伝道局本部に送り、決断を促しました。さらに自分のもとで伝道者を志している六人の青年の「今後一年間の生活の面倒をすべて自分がみる」と押川に約束しました。

当史資料センターには、ランカスターの資料保存室に永く展示されていたこの九枚のうち一枚の銀貨が返還されて保存されており、ホーイの最初期の会計簿 (1886年6月1日～1887年5月31日) の収入欄には、ただ一行「by "A Friend"」として、ホーイがこの約束を誠実に果たしたことが記録されています。

(東北学院史資料センター 日野 哲)



— 建築が語る東北学院の歴史 (3) —

南六軒丁は、専門部の第一候補ではなかった？！

東北学院が現在の大学土樋キャンパス (南六軒丁) の土地を初めて取得したのは、大正5-6年でした。しかし、この時の東北学院は、南六軒丁に専門部を整備することを確定していませんでした。理由は土地の狭さで、折しも国内では、都市郊外に拡大移転する高等教育機関が散見される時期でした (池袋に移転した立教などが好例です)。

南町大火後に評議員会で提示された中学部の再建案の中に、現地再建案と並んで、郊外移転案が見られます。移転先候補地候補地として向山、堤通、古町の名が見え、「東北学院時報」掲載の復旧計画概要からも、既存施設を含む学院全体を向山に移転する構想があったことを読み取れます。しかし、結果的に中学部は現地再建されました。

中学部を現地再建するという判断は、東北学院のこの後の校地計画に大きな影響を及ぼしました。専門部を郊外に整備する案は最後まで残りましたが、しかし郊外に出るには南六軒丁の土地を処分する必要があり、これが難航したようです。最終的に理事会は、「南六軒丁に専門部の校地を確定しました。都市部の利便性と、「市民ニ對シ宗教的感化ヲ及ス便宜上ヨリ考慮シ」た結果であると記録されています。

(工学部 崎山 俊雄)



子供のお祈り



イースター礼拝
東北学院幼稚園にて
2021年4月16日



先日、東北学院幼稚園でイースター礼拝をしました。子供たちも一生懸命、お祈りしました。イエスは言います。「心を入れ替えて子供のようにならないと、決して天の国に入ることはできない」(マタイ 18:3)。ここで「子供」とはどういう意味でしょうか？イエスは続けます。自分を低くして、神様に祈る謙遜な存在こそ「天の国でいちばん偉いのだ」。そして「子供のように神の国を受け入れよ」と子供たちを祝福されます(マルコ10:15)。少年サムエルも3度神様に呼ばれても「僕(しもべ)は聞いております」と言って神様の声を聞きました(「サムエル記上」3:10)。まさに「主を畏れることは知恵の初め」(詩篇111:10)であり、「若き日に造り主を覚えよ」(コヘレトの言葉12:1)です。

(理事長特別補佐〈宗教センター担当〉鐸木 道剛)

ハインリヒ・ホフマン「子供たちを祝福するイエス」
画集『我を思え』(1885年)より



レイノルズ
『幼きサムエル』1776年
フアーブル美術館 モンペリエ

美術による賛美 (6)



渡辺総一「泣くペテロ」油彩
45.5x38.0mm, 1983年制作
(渡辺総一氏提供)

渡辺総一さん(1972年経済学部卒)の初期の絵です。イエスを知らないか否認したのちのペテロが右向きにひざまづいて、岩(ペトラ)に突っ伏して泣いています。

渡辺さんの描く聖書物語の登場人物には顔の造作が描かれず、表情が読み取れません。これは聖書は人間的ドラマであるとともに、我々人間は被造物で無から創られていること(creatio ex nihilo:無からの創造)を示します。人間的感情の表現はルネサンス以降の美術の特徴です。渡辺さんの絵はキリスト教の原点である中世に遡っているのです。1983年の『泣くペテロ』はその最初の作品です。



新教出版社、2004年刊行

(鐸木 道剛)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第9号

2021年6月2日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1

発行責任者: 宗教センター主任 野村信

東北学院宗教センター TEL: 022-264-6558

Email: c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp